資料６

# 次期「新させぼっ子未来プラン」策定に係る
# インタビュー結果資料

## 目　次


インタビューの実施概要　P.1

子育てサークルネットワーク佐世保　P.2

療育親の会　P.5

佐世保市
子育て応援

# インタビュー実施概要

## 1．インタビュー の目的

佐世保市の子どもや子育てに係る実態や子育て世代のニーズ等を十分に把握し、次期「新させぼっ子未来プラン」策定にあたっての検討材料とするために実施したもの。

## 2．実施者

子ども未来部子ども政策課［事務局］が各団体の協力のもと、実施した。

## 3．対象者及び方法

| 区　分 | 対象者 | 実施方法・時期 |
|---|---|---|
| （1）行政／市議会 | 佐世保市長<br>佐世保市議会議長 | 個人インタビュー<br>※平成31年2月に実施 |
| （2）関係者・団体 | 「佐世保市子ども・子育て会議」委員 | ワークショップ形式による分科会等での意見聴取（交換）<br>※平成30年11月から平成31年2月に実施 |
| | 子育てサークルネットワーク佐世保<br>療育親の会<br>※メンバーは幼児教育センターや子ども発達センターと相談をしながら選定。 | グループインタビュー<br>※令和元年６月２４日（月）と令和元年６月２８日（金）の両日で実施<br>※次期プラン策定に係る協議、各種アンケート結果を踏まえて、各種アンケート等では把握しきれないニーズや課題について個別団体へのインタビューによる把握を目的としたもの。 |
| （3）市民（子育て世代等） | 「子育てアイデア交流会」<br>「子育てサロン」参加者 | ワークショップ形式によるサロン等での意見聴取（交換）<br>※平成30年11月から平成31年1月に実施 |

## 4．インタビューの基本項目

①佐世保市における子ども・子育てを取り巻く現状について
　〔佐世保市の強み（特長）と弱み（問題点）〕
②今後５年間で想定される課題について
③課題解決に向けた役割［行政、市議会、関係団体、市民等］と取組について

※今回は、上記のうち、グループインタビューの結果概要について、整理しています。なお、インタビューにおける多くの意見を列記するため、任意の項目ごとにまとめています。

## 次期「新させぼっ子未来プラン」策定に係る子育てサークルネットワーク佐世保・グループインタビュー

○開催状況

日時：令和元年６月２４日（月）１０時００分～１２時００分

開催場所：佐世保市中央保健福祉センター　すこやかプラザ　６階研修室１

参加者：子育てサークルネットワーク佐世保（８名）

司会・インタビュア：子ども政策課（４名）

同席者：子育てサークルネットワーク佐世保及び幼児教育センター（４名）

### ■佐世保市の強み

・全国的にみても出生率が高い。

・公共施設がコンパクトにそろっている。

・身近に海や山など豊かな自然がある。

・子ども発達センターのわいわい広場（子育て支援広場）が毎日、開いている。

### ■佐世保市の弱み

・貧困に対する支援が少し弱く、子育てしにくい面がある。

・未就学児と小学生の兄弟が一緒に遊べる居場所が弱く、そういった支援が増えないと子育てしやすい街にならないと思うので支援が必要。

・未就学児と小学生の兄弟が子育て支援センターを利用できず行き場がない。

・路線バスの運行経路がわからない。

・市内の施設（佐世保公園、子ども発達センター　等）は駐車代がかかるので滞在時間に制限がかかる。駐車場代の割引などがあれば少し利用しやすくなるかと思う。

### ■サークルとしての現状（課題、利用者の変化、不便に思っていること　等）

（サークル利用者について）

・子育てサークルの利用者が、以前は転勤族等でママ友がほしいという理由で利用している人が多かったが、最近はＳＮＳの普及で会わなくても話ができるので子どもたちを遊ばせる場所がほしいという利用者が多くなっている。（ママ友がほしいわけではない。）

・主に育休中の方が来てくれているが、１年で仕事に復帰する方が多いため、昼のイベント等に来なくなり、つながりも薄くなる。土、日も活動しているが、家族で過ごしたいと思う方が多いので参加率が高くない。

・今、祖母当の手助けがあり家庭内の子育てで満足している世帯が多く、サークル利用率が下がっている。そのことも影響しているのか、いろんなお母さんと関わる機会が少なく、周りと調和するということを知る機会が幼稚園や保育所に入るまでない。だから、自分の子しか見ることができず、幼稚園などの集団生活を行う際に、「普通、こうですよね」みたいな固定的な考え方になる。

・みんなで子育てするという気持ちがなく、お母さんが一人で抱え込むような状況がある。親が育っていく場所が必要となっている。

・孤立化している親の掘り起しが必要だが、当人たちは孤立していると思っていない。ＳＮＳの普及もあり、誰とも話をしていないということが問題と思っていない。

・子どもと向き合いきれなくて、仕事に復帰する方もいる。仕事に復帰すると余計に子どもと向き合う時間がとれなくなる。

（不便に思っていること～施設の利用について～）

・子ども食堂をしている団体からは、公民館等は飲食禁止などの制限もあり、調理室内でのみ飲食ができるところがある。また、地域や公民館長の配慮による取り扱いの違いも見られるため、もう少し臨機応変に対応してほしいという声もある。
・公民館や公共施設は原則飲食禁止であるが、室内飲食が認められているところもある、一方では、ある施設で室内でシート等を引いて部屋の端っこで飲食を使用としたら断わられたということもある。
・公民館の使用について、以前から使用している団体が優先されてしまうので使用する時のハードルが高い。
・公民館の有料化について、本来地域が子どもと積極的に関わらなければならない時代なのに、使用料がかかるというのは公民館を使用しにくくしており、少し時代に逆行しているのではないかと思う。

（サークル活動の中での課題）

・仕事への復帰後においても継続的にサークル活動に関わってもらうためには、平日の昼以外の時間に活動することの必要性を感じる。

**■サークル間や地域・行政との連携のあり方・課題**

・健診の待ち時間について、託児や保健師だけの対応では、限界があるので、母の今の声を聴く機会を設けるなど待ち時間をママたちの交流の時間に使えないか。また、その際に子育てサークルの案内等をさせてもらいたい。
・赤ちゃん訪問の訪問員や健診時の保健師の質が異なる。（丁寧にアドバイスをしてくれる方もいれば、そうでいない方もいる。）
・子ども保健課と子育てサークルネットワークをつなげる役目が必要。
・第１子のときのサポートを保健師が重点的に行うことが必要。虐待等の法令も変わってきている。
・サークル内の連携がより必要。（内部だけではなく、外部のサークル。お互いを知ることで、気づくこともある。）
・サークルネットワークに対する運営費の補助が望まれる。
・サークル活動での問題点等について、行政が話を聴く場を継続的に作ってほしい。
・サークルの活動の場の確保が必要。
・相談できる場所があることが、虐待防止につながると思うので、サークルでもっとつながれればと思う。
・兄弟児が楽しく過ごせる居場所として、地区の公民館を使って地域で面倒を見るなどの仕組みが必要ではないか。

**■今後５年間で目指すべきサークルの姿や課題について**

・会員を減少させないようにしたい。
・さまざまな状況を知ることで、多様性を受け入れることのできる強い親子を育成したい。
・最近、目に見えて効果が出ることにお金をかける親が多く、心の成長であるとか目に見えないところにはお金をかけない。（成果や結果を出すことに親が一生懸命になりすぎている。）
・想像力を働かせて、相手の立場に立てない親子が多い。
・子育てサークルネットワークについて、加入している意味がないと入らないという風潮があるのでメリットをアピールしないといけない。
・数十年サークル活動を続けているけど、後継者が少なくなり、継続が危うい状況である。
・自然と触れ合うのは子どもにとって大事なので現在の活動の継続は必要である。
・サークルは幼児教育・保育の無償化などの影響で、どんどん利用者が減っていくことが予想される。

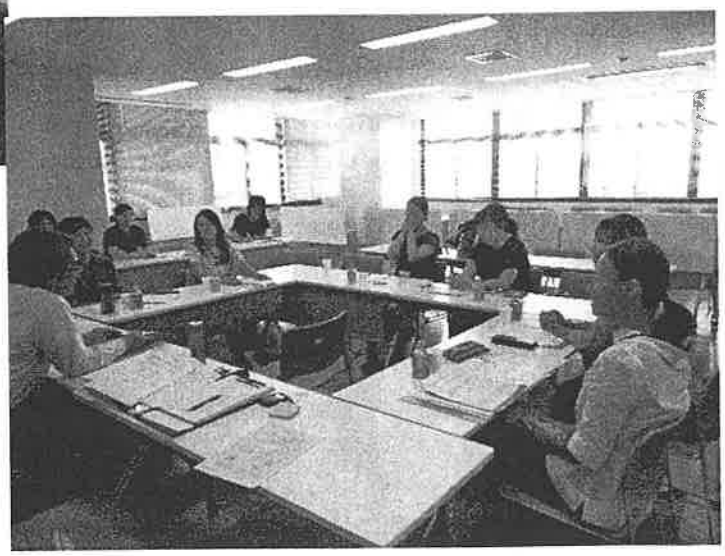
・利用者にとって、サークルに参加するメリットがあれば、使えるお金次第では、もう１押しできる。
・ちょっとの心遣いで頑張ろうとする母は増えると思う。

**■就学児童への支援について**

・乳幼児期は手厚いが、小学校からの支援が手薄。
・親としては部署とか管轄でなく（教育委員会とか子ども未来部）、乳幼児から学生までのつながりが必要と考える。
・幼稚園から小学校に進学する際の小学生の居場所がない。学童はお金を払わなければならなく、利用できない方もいる。また、校区内の児童クラブに空きがないところもある。
・専業主婦家庭で、学童は利用できないため、居場所がなく、お菓子などをくれる家に集まり、トラブルのもととなっている。そういった居場所のない子どもが増えており、単なる学童の不足のみの問題ではないように思える。
・居場所のない子どもを受け入れる施設の一覧が必要かと思う。
・地域の力を借りて、夏休みや長期休みのときに居場所のない子どもを受け入れるような仕組みなどをつくれないか。
・学校長の考え方もあると思うが、学校に様々な啓発のチラシ等がただ積んで置いてあり、活用されていないのではどうかと思う。

以　上

（インタビュー時の様子）



## 次期「新させぼっ子未来プラン」策定に係る療育親の会・グループインタビュー

○開催状況

日時：令和元年６月２８日（金）１０時００分～１２時００分

開催場所：サンクル四番館　子ども発達センター　１階小会議室

参加者：療育親の会（１０名）

司会・インタビュア：子ども政策課（４名）

同席者：子ども発達センター（２名）

### ■窓口・相談体制について

- 保育と福祉の部署が異なるため、転入者にとってわかりづらい。
- 子育て中の保護者に対して、福祉・教育等の分野横断的な支援を行うコーディネーターがいない。（他市では福祉課への設置事例あり。）
- 親が主体となって情報を集めるなど、すべてにおいて、動かなければいけない状況がきつい。
- 夏休みに子どもを預けたいとき、相談支援事業所がすぐに対応してくれず、預けられなかった。
- 対応窓口の一本化、長期的な見方は必要。
- ライフステージごとに関係機関等の間を取り持つ課（相談を１つで受けれる部署）がほしい。
- 幼稚園に入る１年前や６ヶ月前に相談できるところについて、市側から丁寧な案内がほしい。

### ■療育支援・教育について

- 早期療育が必要だと思うので、子ども保健課の赤ちゃん訪問時から、療育が必要な子どもへのサポートを継続して行って欲しい。
- 健診で「要観察」となったときにどう対処していくか悩む親は多い。（対処するかしないかでその後の子どもの成長に大きく違いがあると思う。）
- 「要観察」の子は早めに対応する必要があると思う。
- 自閉症の子どもで、学年で療育ができる線引きがあるが、学年で線引きをされると早期療育を受けられず、対処が後手後手になってしまう。
- 子どもの支援につながるまでの時間が長くかかる。支援につながった人は幸せで、より早く支援につながるような取り組みが必要。
- 10 年前、幼稚園や保育所において、発達障がい向けのコーディネーターはいたが、理解してくれる先生がいなかった。研修とかがあるはずなので、本当に受けているのかと思ったことがある。
- 幼稚園、保育所において、先生の障がいに関する知識の個人差が大きい。
- 心の教育が必要と思うが、「いのちをみつめる月間」は、６月に限定しないほうがよい。（他市では土曜日に授業があり、「心の教育」を行っているので他県の状況もみてもらいたい。）
- 学校で、タブレット端末導入により、ＬＤ（学習障害）の子どもの対策になる。

### ■情報共有について

- 個人で子どもの問題に対処していくとしても誰に何を聞けばよいのかの情報がない。
- まどか教室の中で、親の会の存在や情報等を収集することができた。

・子ども発達センターの「にこにこルーム」は情報交換もでき、ありがたかった。
・赤ちゃん訪問の際に、親の会などの情報提供がとても重要。親としては、なかなか情報が入ってこない状況であり、親の会に入ったことで先輩ママなどから情報が入ってくるようになってよかった。
・母親は子どものパニック症状で悩んでいたが、父親はその様子を知らず、言われて初めて気づくことが多い。
・（実体験から）父親と母親とでは子どもの発達障がい等の症状に対する理解の差があるので、父親向け勉強会やセミナーが必要。
・話をすると、意識もかわるので父親も親の会に来てほしい。
・成長段階に応じた行政からの支援などの情報が少なく、子どもの将来が見えない。
・障がい者が働く就労事業所以外の事業者でも障がいに理解のある企業が今以上に増えてほしい。

**■施設の受け入れ体制・居場所について**

・心臓病や病気を持つ子の幼稚園、保育所探しは、なかなか受け入れてもらえずに大変だった。
・心臓病について、子ども発達センターの２階に相談したが、ことわられたので福岡まで行っている。佐世保は病院が少ない。
・佐世保市には、すぎのこ園があるが、待機が多く、子ども発達センターを通さないといけない。施設も充足していないし、利用しづらい。
・医師不足や医療機関が少ないのであれば、それを補うようなサポートが必要ではないか、そうでなければ支援が止まってしまうと思う。
・佐世保市は、全体的に子どもの発達障がい等を見てくれる医療機関の数が少なく、医療側にも問題がある。
・障がい児のショートステイが使える状況を作ってほしい。親にはレスパイトが必要。
・「まどか教室」へ行くように進められるが、送り迎えが働いている親にとってはつらい。（仕事が選べない。）
・長崎市では、「まどか教室」側が対象者の学校に出向いて対応している。この形にしてもらうことで、親は仕事を休まなくて済む。
・保護者は「親の会」で互いに情報を共有しながら、リフレッシュができるが、子どもたちにはないので、同じような境遇の子が集まって、何かを一緒にできる場所がほしい。
・内部障がいを持っているので、外見からはわかりにくいものの、普通の子と一緒に遊べない。（大勢の子どもが集まる場に連れていきにくい。）
・学校に子どもたちが気軽に過ごせるスペースが必要。（困った人だけでなく、誰でも利用可能な場所）

**■連携について**

・当時、「かん黙」というものが知られておらず、かかりつけの病院に相談しても「お母さん、それは大丈夫、心配ない」と言われた。その後、子ども発達センターの作業療法士が保育所に来ることがあり、検査を上手にしてもらい、保育所との連携についても動いてもらった。やはり、病院、学校や保育機関のつながりは重要。

・幼児教育センターの集まりや、療育を含めた子育て支援について、それぞれはよい試みを行っているが、市民からみると全体的にバラバラの取り組みをしているように見えてしまう。
・社会福祉協議会にはボランティア養成講座があり、そういったところを利用した現場が連携できる仕組みが必要だと思う。
・つながりという面では子ども発達センターに在籍していた作業療法士が障がい福祉課に異動し、つながりを持とうとしている点は期待できる。
・子ども発達センターですべてが賄えるわけではなく、最終的に福祉へつなぐのは親という状況なので連携があればと思う。

**■親同士のつながり**

・親の会について当時の子ども発達センターの医師に提案してもらい、同じ境遇にある人たちの集まりができたことには助けられた。
・同じ境遇を持つ親と意見交換をしたい、悩みを共有・相談したいと思っている。
・交流する場が少ないので、自分が交流する場をつくってみることにした。しかし、実際の活動の中では、親が主体とならなければならない状況。動いてくれる方がいるほうが悩みや情報を共有しやすいのではないかと思う。（伊万里市では、各種集まりについて、声掛けを保健センターの方がしてくれている。）（実際、親の会の中で、特別児童扶養手当の制度を知るなど、情報が得られた。）
・未就園児などの子どもの集まりの情報がない。親の会について、同じ境遇にある人に対して、連絡等したいと思うが、個人情報等の観点から情報共有が難しい。

**■その他**

・今回、このような親の声を聴くという機会を設けてくれたことについて、ありがたかった。
・今後もこういった機会があればよいと思う。

以　　上

佐世保市
子育て応援